W・K・バルトンが濃尾地震後に大垣で撮影した写真と撮影地点について

『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究 その5

STUDY ON THE PHOTOGRAPH AND THE PHOTOGRAPHY PLACE PHOTOGRAPHED
IN OGAKI BY W. K. BURTON

Study on “THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.” part 5

平山育男*

Ikuo HIRAYAMA

This article considered the photograph which W. K. Burton photographed after the *Nobi* earthquake in *Ogaki* of the stricken area, and following points become clear. There are at least six pieces (①～⑥) of photographs which he photographed just after the earthquake in *Ogaki*. Photograph ① and ② photographed *Ten-jinsha* shrine at *Shinmachi*. Photograph ③,④ photographed the ruin of a fire of *Jorenji* temple. Photograph ⑤ overlooked the east side from the *Ogaki* Castle castle tower. Photograph ⑥ photographed the former *Rokugai* school at *Kuruwamachi*.

Keywords : *the Nobi earthquake, W. K. Burton, Ogaki*

濃尾地震, W・K・バルトン, 大垣

1. はじめに

筆者はこれまで明治24(1891)年10月28日に発生した濃尾地震においてバルトンとミルンらが写真記録集としてまとめた『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』^{参考1)}(以下、GEJ)について考察を加え、同書は初版、2版に各2刷までであることや、各発刊日を示した^{注1)}。またGEJに掲載の被災地写真34枚中25枚をバルトンが撮影し^{注2)}、写真解説の20%以上が『THE JAPAN WEEKLY MAIL.』紙からの引用であることを示した^{注3)}。そして、調査の日程はバルトンが地震発生の日10月28日中に東京を立ち、名古屋、岐阜、笠松、根尾谷、大垣を巡り、神戸から11月10日に横浜へ帰着したことを示した^{注4)}。

ところで、GEJに所収される写真の内、大垣で撮影された2枚は具体的な撮影地点が従来明らかではない。一方、バルトンは被災地で72枚の写真を撮影した^{注5)}が、GEJへの所収は25枚に過ぎず、未所収の47枚に大垣で撮影された写真の存在する可能性がある^{注6)}。そこで本稿ではバルトンが大垣で撮影したと考えられる写真^{注7)}を示した上で、その撮影地点を明らかにすることを目的とする。

2. バルトンが大垣の濃尾地震被災地で撮影したと考えられる写真

以下、バルトンが大垣の濃尾地震被災地で撮影したと考えられる写真を示す。

2-1 GEJ掲載の写真

バルトンが大垣の濃尾地震被災地において撮影した写真の内、GEJ

に所収されるのは初版 PLATE XXVII. (以下、写真①)、PLATE XXVIII. (以下、写真②)^{注8)}の2枚で、写真題名はいずれも“LIFE AFTER THE EARTHQUAKE.” [和訳：地震後の生活]である。写真①は解説で

At Ogaki where this picture was taken, out of 8000 houses only about 30 remained,...

[和訳] この写真を撮影した大垣では、8,000棟の家屋のうち残ったのは30棟ほどで《以下略》

とあり大垣での撮影が判明する。また、写真②は解説題名が RUIN AT OGAKI.

[和訳]大垣の廃墟

とあることから、大垣の惨状を示したものであることが分かる。

2-2 GEJ未掲載で工学会において投影された写真

濃尾地震後の明治24(1891)年11月25日、工学会においてバルトンは幻灯の投影と説明を行った。この中でバルトンは

尚ホ大垣ノ一写真ヲ示ス一面ノ毀壞荒廢中唯一個ノ釣鐘アルヲ見ル知ルベキ一寺院アリシ処ナルヲト説キ^{注9)}

と説明する写真を提示したが、釣鐘が写り込む写真をバルトンはGEJに掲載していない。

一方、バルトンの撮影した写真の著作権は帝国大学^{注10)}にあり、その見返りであろうか、バルトンは帝国大学から150円を受け取っている^{注11)}。一方、GEJ所収のものも含め、写真の多くは宮内庁へ献納されたが、写真の2次利用は限定され、国立科学博物館所蔵を除く

* 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng., Dr. Design

図 1-1 GEJ 初版 PLATE XXVII. (写真①)

図 1-2 GEJ 初版 PLATE XXVIII. (写真②)

岐阜縣下大垣之圖

図 1-3 宮内庁所蔵“岐阜県下大垣之図”(写真③) 画面向かって右端から 1/3 程の場所に釣鐘

岐阜縣下大垣之圖

図 1-4 宮内庁所蔵“岐阜県下大垣之図”(写真④) 木の根元に釣鐘

図 1-5 宮内庁所蔵“岐阜県大垣城ヨリ市中ヲ望ム図”(写真⑤)

岐阜縣大垣城ヨリ市中ヲ望ム図

岐阜縣下大垣小學校之圖

図 1-6 宮内庁所蔵“岐阜県下大垣小学校之図”(写真⑥)

と同時代における他写真集などへ写真の転載は認められない^{注12)}。そこで宮内庁所蔵の写真から、上掲した“毀壞荒廢中唯一個ノ釣鐘アルヲ見ル知ルベキ一寺院”とする内容を有し、かつ2次利用のないものを探すと、“岐阜県下大垣之図”とする題名を持つ写真にその

情景を見出せる。この写真は中央防災会議による『1891 濃尾地震報告書』付属 CD-r に所収され、kunai116 (以下、写真③)、kunai117 (以下、写真④) の番号が付され整理される^{注13)}。但し、この写真には宮内庁でも前掲の写真題名しかなく、詳細な解説は付されない。

図 2-1 大垣市新町天神社

図 2-2 大垣市新町天神社及び大垣城天守閣

図 2-3 大垣市中町乗蓮寺

図 2-4 大垣市中町乗蓮寺及び天神橋

図 2-5 大垣市大垣城天守閣より東方を望む

図 2-6 大垣市郭町東

なお、濃尾地震後の大垣で撮影された写真では“大垣円覚寺”と題されるものが岐阜県図書館に複数枚所蔵され^{注14)}、これには焦土の中へ墜落した梵鐘が写り込む。しかし、この写真では背後に外壁の土壁は落ちるが倒壊には至らぬ堂宇があり、“一面ノ毀壊荒廃中唯一個ノ釣鐘”とする説明とは内容が異なる。また、この写真は販売に供されており、バルトンによる撮影とは考え難い。

2-3 GEJ と工学会において未発表で宮内庁に所蔵される写真

更に、宮内庁所蔵の濃尾地震被災地写真で、大垣を撮影し、2次利用のないものに“岐阜県大垣城ヨリ市中ヲ望ム図”（以下、写真⑤）“岐阜県下大垣小学校之図”^{注15)}（以下、写真⑥）の2枚が存在する。

3. バルトンが大垣の濃尾地震被災地で撮影したと考えられる写真の撮影地点

このようにバルトンが大垣の濃尾地震被災地において撮影した写

真は、GEJ 所収の 2 枚である写真①、②、GEJ 未所収で宮内庁に納められた写真③～⑥の 4 枚、合計 6 枚の存在を確認できる。しかし、この 6 枚は従来、具体的な撮影地点の特定はされていない。そこで、以下では各写真について既往の研究成果を挙げた上で、撮影地点の考察を行いたい。

3-1 写真①の撮影地点

3-1-1 写真①の従来の研究

写真①は大垣における濃尾地震の被災状況を示すものとして、これまで度々紹介されている。以下、その内容を見て行きたい。

・『災害写真集 濃尾地震から100年 今、防災を考える』

『災害写真集濃尾地震から100年今、防災を考える』^{注16)} (以下、『防災を考える』)は、濃尾地震発生から100年目の平成3(1991)年に発刊され、被災状況を示す写真、絵画などと発刊時における同一地点の写真を多数掲載する。同書にはGEJからも多くの写真が転載され、“濃尾地震 大垣町の廃墟”と題し、写真①、②が転載されるが、両写真の撮影地点については具体的な検討がなく、“現在の大垣市付近”として、大垣別院を南西方向から撮影した写真を掲げるに過ぎない。なお、写真①には後述のように大垣別院は写らず、“現在の大垣市付近”は、写真①の撮影地点を撮影したものではない。

・『濃尾震災100年記念誌』

『濃尾震災100年記念誌』^{注17)} (以下、『100年記念誌』)も、濃尾地震発生後100年目の平成3(1991)年に出版された。『100年記念誌』では転載した写真①の説明に

震災後の廃墟に行く・担ぐ荷物は家族にとってかけがえのない貴重品なのであろう^{注18)}

とするのみである。

・『濃尾地震写真資料集』

『濃尾地震写真資料集』は、岐阜県市町村史研究連絡協議会が、岐阜県歴史資料館の指導の下、岐阜県を中心とする濃尾地震の写真資料の発刊を行い^{注19)}、写真①が転載され^{注20)}るが、傍らには武藤綾男によるGEJの翻訳を基本とした説明が転載される^{注21)}のみで、写真①の撮影地点についての詳細な考察はない。

・『写真集思い出のアルバム大垣』

『写真集思い出のアルバム大垣』は、大垣市の古写真を編集し出版したもので、ここに写真①が転載される。同書では

瓦れきのなかから貴重品を掘り出して運ぶ2人の婦人^{注22)}

と写真に説明を付すのみで、具体的な撮影地点の説明はない。

以上のように、従来、写真①の撮影地点は具体的な検討がない。

3-1-2 写真①の概要と読み取れる情報

次に、写真①の概要を示し、写真から得られる情報を整理する。

・写真①の概要

近景は画面向かって左下から向かって右に道路があり、ここを婦人と見られる2人が天秤棒で荷物を運ぶ姿が写る。また、傍らには赤子を背負った女兒が振り返っている。中景は道路に面する敷地で、一面、瓦礫の山となっている。遠景はやや離れて道路際に石垣を築いた一角があり、その奥には木々が茂る。

・写真①から読み取れる情報

写真①を検討することで、撮影場所の持つ要件を確認できる。

道路と撮影の方向: 写真①では人物の影が向かってやや左側に傾く。大垣における濃尾地震焼失地は“大垣町火災地図略“(図4)^{注23)}によ

ると、大垣城北東の伝馬丁、大垣城東側の清水丁、中丁、上魚ヤ丁、下魚ヤ丁、本丁(一部)、となる。また、明治24(1891)年の大垣における市街地の街路は、同年に陸地測量部が測量した2万分の1地形図(図5元図)^{注24)}、大垣市街の美濃街道は“大垣赤坂両宿附助郷村々図”^{注25)}で知ることができる。焼失地において基本的に道路は東西方向もしくは南北方向に配されるが、写真①における焼失地の道を行く人物の影は道路に平行し、11月にしては比較的短いことから、東西方向に進むものではなく、南北方向における道路を北へ向かって歩く婦人らを、北側を向いて撮影したものと考えられる。また、撮影時刻は南中に近い時間と考えられるが、人物の影は、写真では向かって左側へやや傾くことから、正午に近い午前中と判断できる。なお、バルトンが2枚の写真を撮影したと考えられる明治24(1891)年11月8日^{注26)}は、朝の6時が快晴、14時は晴であった^{注27)}。

石垣を築いた一角: 画面向かって左側に石垣を築いた一角がある。石垣は中央部が開き、2本の柱状のものを確認できる。写真①のGEJにおける解説では

In the background there is an enclosure where at one time there may have been a temple.

[和訳] 背景に写る石垣は、寺院の境内地を囲んでいたのであろう^{注28)}

とあり、寺院もしくは神社の可能性が高い。

3-1-3 写真①の撮影地点の検討

濃尾地震後の火災による大垣市街の焼失地は大垣城東側の地域と東北に位置する伝馬町となる。但し、街路の関係を見ると、伝馬町は街道が東西に通じることから条件に合わず、撮影地点は大垣城東側で、通りが南北に配される地域と考えるのが妥当である。そこでこの地域で通り際に石垣を築く社寺に当たると、現在は大垣市新町1丁目に位置する天神社^{注29)}に行き着く。同社は現在、南北に通じる市道西側に位置し、境内周囲に石垣を築き、この上に切石の玉垣を設ける。入口は南北に通じる市道側に設けるが、南正面にも南北の市道から分岐した東西方向の道に対して入口を設ける。社殿は南面し、南側入口が主要な入口で、その様子は写真①に示される石垣の様子ともよく対応する。

即ち、写真①は天神社東側の現市道上に立ち、北北西方向を向き、天神社とその南側の敷地を撮影したものと判断できる(図5)。

3-2 写真②GEJ初版PLATE XXVIII. の撮影地点

3-2-1 写真②の従来の研究

写真②も大垣における濃尾地震の被災を示す写真として、従来、度々紹介されている。

・『災害写真集 濃尾地震から100年 今、防災を考える』

写真②は、写真①とともに『防災を考える』に“濃尾地震 大垣町の廃墟”と題して掲載される^{注30)}。この写真に対し同書発刊当時の写真は、前掲した“現在の大垣市付近”とする大垣別院を南西方向から撮影したものである。しかし、写真②にも大垣別院は写らず、撮影地点についても具体的な検討はない。

・『濃尾震災100年記念誌』

『100年記念誌』^{注31)}では写真②を掲載し、その説明に

廃墟にたたずむ人々・大垣のまちは地震の後、火災に見舞われたと記すのみで、その具体的な撮影場所の言及はない。

・『館蔵写真集 第1集』

『館蔵写真集 第1集』は岐阜県歴史資料館が所蔵する1000点余の古写真を紹介するため編集され^{注32)}、写真②を掲載する。同書では地震後の大垣 パートン撮影

『1891年の日本の大地震』より^{注33)}

と写真②に対して記すのみで、詳細な撮影地点の言及はない。

3-2-2 写真②の概要と読み取れる情報

・写真②の概要

写真②は画面手前が一面の焼失地で、地面には瓦や陶器が散乱する。近景では大人の女性2人と子ども2人が写り、女性の1人は右手に板状の材を持つ。中景は向かって右側に石垣が見え、この手前に画面を左右に貫く道路を確認できる。また、画面中央では既に仮設の建物が複数棟確認でき、向かって左側中景には焼失を免れた大型の建物を複数棟確認できる。遠景両脇には大きな木々が写り込み、中央奥には大垣城天守閣、向かって右側には背景の山々が見える。

・写真②から読み取れる情報

大垣城：画面奥中央に大垣城天守閣を望むことができ、撮影地点は大垣城からさほど離れてはいない場所となる(図2、3)。

山並み：大垣城の天守閣の背面には山並みを望むことができる(図2、3)。大垣城の西から北西における山並みが写り込んだこととなる。

撮影の方向：写真に写り込む大垣城、背面の山並みとの関係から、撮影は東から西を向いて行ったと判断できる。なお、人物の影は写真①に比べやや長く、北西方向を向くことから、写真②の撮影時刻は写真①よりやや早い午前中とすることができる。

道路：画面向かって左側の中景では人物3人を確認でき、3人は向かって左側から前向き、後ろ向き、前向きで歩いている。この方向を

図3 GEJ 初版 PLATE XXVIII. (写真②) 部分(拡大) 白線内が大垣城、背景に2筋の山並みを見ることができる。

図4 “大垣町火災地略図” 向かって左中央に“天主閣”とある

たどると、画面向かって右側の石垣手前には白い筋が確認でき、この筋を“道路”と考えることができる。撮影の方向を考慮すれば、道路は南北に通じると判断できる。

3-2-3 写真②の撮影地点の検討

以上に挙げた条件の内、詳細に検討が必要な点は、焼失地と大垣城及び背後の山々の関係である。以下、この2点を検討する。

大垣城天守閣は第2次世界大戦の空襲で焼失したが、昭和34(1959)年に当初の石垣上に鉄筋コンクリート造にて天守閣が復元され^{注34)}、外観は当初を踏襲する。写真②に示される焼失前の大垣城天守閣は入母屋造で、棟を東西に渡し、厳密には時計回りに20度程、南東方向へ振る^{注35)}。写真②における天守閣を詳細に観察すると、建物の東側面と南側面を確認できるため、天守閣の棟方向が時計回りに20度程振れることを考慮すると、撮影地点は天守閣の真東より南東側へ位置する地点と考えることができる。

写真②背後の山並みは、大垣城西北西から北西の山になるが、大垣城の西から北西には、順に養老山系、南宮山、池田山などを望める。撮影地点と大垣城との位置関係から絞り込むと、写真②で大きな山姿を見せるのは、城の北西に位置する池田山、前景となる小高い山は金生山となる。

以上の考察から、濃尾震災後の大垣市街地における焼失地は大垣城北東の伝馬町から東側にかけての地域となるが、大垣城天守閣との位置関係、写真背景に写り込む山々の姿を考慮すると、写真②の撮影地点は天守閣から見て東南東から南東の方向となる。また画面の向かって右側には、中景に石垣を見ることができる。近辺においてこの施設は写真①に示した大垣市新町の天神社の石垣となる。

即ち、このように考えると、写真②は、天神社と通りを隔てた敷地から北西方向を向き、焼失地及び大垣城、そして背後の池田山などを撮影したとすることができる(図5)。

3-3 写真③、写真④“岐阜県下大垣之図”の撮影地点

3-3-1 写真③、写真④の従来の研究

写真③、写真④とも従来、書籍などで紹介されたことはない。

3-3-2 写真③、写真④の概要と読み取れる情報

・写真③と写真④の関係

図5 明治24(1891)年測量地形図『大垣』とパルトンによる撮影地点

写真③、写真④、2枚の写真においては、工学会の説明で“一面ノ毀壞荒廢中唯一個ノ釣鐘アルヲ見ル知ルベキ”とされるように、一面の焼野原に釣鐘が示されるため、同一敷地を撮影したことが分かる。また釣鐘前方には特徴ある枝振りの樹木が各写真にもあるため、これらを含め、撮影場所は写真③が寺院と考えられる敷地の向かって左側、写真④が向かって右側を撮影したと判断できる。

・写真③、写真④の概要

写真③は近景に堀の水面があり、これに並行して石垣がある。石垣縁の敷地では向かって左側にやや背の高い木が立ち、中央に梵鐘、向かって右側に特徴的な形をして焼け出された木の幹があり、画面向かって右端に奥に続く道と、そこを歩く人物が確認できる。中景では、画面向かって左側に職人2人が建築に取りかかる仮設小屋があり、向かって右側には既に完成した切妻茅葺の仮設小屋を始め、数々の仮設施設を見ることができる。遠景にも、仮設小屋があり、背景には木々が確認できる。

写真④は近景に左右に通じる通りが写り込む。また、この通りに並行して堀があり、石垣を望める。そして通りに対して画面向かって右端で直交して画面を縦に貫く通りが堀に仮設的に設けられた丸太の橋を介し接続する。中景は一面の焼け野原で瓦礫が山積みとなる。画面向かって左側の敷地では特徴的に屈曲し焼け出された木の幹があり、傍らに梵鐘が転がるが、背後では2人の職人により仮設の小屋が既に建設されている。縦に延びる道では手前に向かって歩く男性3人、奥に向かって歩く子どもとこれに伴うもう1人の人影があり、更に奥には天秤棒を担ぎ奥に向かって歩く2人が確認できる。向かって右側の敷地も一面、瓦礫の山で、奥には既に切妻造で茅葺とする小規模な仮設の小屋がある。遠景は、両側に木々があり、中央には複数の仮設小屋、通行人を確認できる。

・写真③、写真④から読み取れる情報

2枚の写真③、写真④を検討すると、この撮影地点は以下に挙げるような要件を持つことを読み取ることができる。

撮影の方向：写真において街道を通行する人物の影を写真④で見ると、向かって左側にやや傾く。

道路：写真④から、街道が画面の前後に通ることが確認できる。

水路と橋：写真④では画面向かって左下に石積が確認できるが、写真③で見ると手前に水面が写ることから、石垣は水路のものと確認できる。また、写真④によれば前述の街道はこの水路を横切るが、橋は震災の影響であろうか喪失し、丸太数本が仮設的に渡される。

水路手前の道路：写④によると街道は水路を渡ると、街道に交差して画面手前の左右に、水路と平行して道のあることが確認できる。

寺院の位置：釣鐘があり寺院と考えられる敷地は、街道と水路の交差する地点の内、画面の向かって左奥に位置することとなる。

3-3-3 写真③、写真④の撮影地点の検討

大垣市街の美濃街道を岐阜方面から見ると、街道は東から進んで伝馬町から城の東側を南下した後、城の南側を西進する。なお、“大垣赤坂両宿附助郷村々図”の凡例で“溝”とされる部分が水路と判断することができる。焼失地との関係で見ると、本丁西側は旧大垣城の内堀、南新丁から清水丁へ屈曲してのびるものが外堀^{注36)}と判断できる。一方、明治24(1891)年の大垣市街地の主要寺院配置は、既出の同年に測量された2万分の1地形図^{注37)}より、焼失地における寺院は本願寺東別院を含め5寺院と判明する。

以上、濃尾地震における大垣市街の焼失地において主要道と水路が交差する角地に配される焼失寺院を絞り込むと、全ての条件を満たすものは現在、大垣市中町に位置する乗蓮寺に限られる。乗蓮寺は敷地南側に旧大垣城外堀が東西に配され、これと直交し南北に配される道が水路を渡るため、ここに天神橋が架けられる。そして明治24(1891)年の地形図によれば、天神橋を渡った先で、道路はT字路となり、水路に沿って東西に道が配される。

即ち、写真③、写真④、2枚の写真は、天神橋を南岸から北を向いて乗蓮寺の焼け跡を撮影したもので(図5)、撮影時刻は影の方向を勘案すると明治24(1891)年11月8日10時頃となる。

なお、乗蓮寺の被災状況は『大垣市史 中巻』でも

明治二十四年十月廿八日濃尾地震の際、堂宇倒壊の上類焼し、悉く灰燼に帰す。惨状筆舌に尽くし難し^{注38)}

と、他の寺院に較べ被害の甚大さを強く述べており、深刻な状況をバルトンは写真に収めたと言える。

3-4 写真⑤“岐阜県大垣城ヨリ市中ヲ望ム図”の撮影地点

3-4-1 写真⑤の従来研究

写真⑤は従来、書籍などでは未紹介である。

3-4-2 写真⑤の撮影地点の検討

写真⑤は写真題名にあるように大垣城天守閣から市街を望んだものである。既述のように大垣における濃尾地震後の火災は大垣城の東側で発生した。写真⑤では中景一帯に焼失地が広がるため、写真⑤は天守閣から東側を望んだものと判断することができる(図5)。また、画面向かって右側中景に写り込む洋風の建物が、写真⑥の建物に合致する。

3-5 写真⑥“岐阜県下大垣小学校之図”の撮影地点

3-5-1 写真⑥の従来研究

写真⑥についても、従来は書籍などで紹介されたことはない。

3-5-2 写真⑥の撮影地点の検討

写真⑥は宮内庁において“岐阜県下大垣小学校之図”と題されるが、校名は明らかでない。但し、建物は写真⑤で述べたように大垣城の南東側に位置するため、これは郭町に位置した旧六街学校で、明治13(1880)年に竣工した校舎と判断できる^{注39)}。同校には写真⑥とほぼ同じ位置から濃尾地震後に撮影された写真が残る^{注40)}。また、当時の配置図によると、写真⑥は校地北東の堀の東岸から南西を向いて撮影したことが分かる(図5)^{注41)}。

4. さいごに

濃尾地震後、バルトンが被災地である大垣において撮影したと考えられる写真について考察を加えたが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) バルトンが濃尾地震後、大垣で撮影した写真として、GEJ所収の2枚である写真①と写真②、GEJ未所収で宮内庁に納められた写真③～⑥の4枚、合計6枚の存在を少なくとも確認できる。
- 2) 写真①は大垣市新町1丁目の天神社東側の現市道上に立って北北西方向を向き、同社と南側敷地を撮影したものである。
- 3) 写真②は天神社と通りを隔てた敷地から北西方向を向き、焼失地及び大垣城、背後の池田山などを撮影したものである。
- 4) 写真③、写真④は天神橋南岸から北を向いて乗蓮寺の焼け跡を撮影したものである。

- 5) 写真⑤は大垣城天守から東側を望んだもので、画面向かって右側中景にある洋風の建物が、写真⑥の建物に合致する。
- 6) 写真⑥は郭町に位置した旧六街学校校舎の北東面を、堀の東岸から南西を向いて撮影したものである。

参考文献

1) John Milne. and W. K. Burton. Plates by K. Ogawa. : The Great Earthquake in Japan, 1891.

2) 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会：1891 濃尾地震報告書及び附属 CD-r、2006. 3

3) '91 中部国際防災の 10 年事業実行委員会：濃尾地震写真集 濃尾地震から 100 年 今、防災を考える、1991. 10

4) 濃尾震災 100 年記念誌編集委員会：濃尾震災 100 年記念誌、1991. 8

5) 岐阜県市町村史研究連絡協議会：濃尾地震資料集、1978. 10

6) 陸地測量部：大垣、明治 24(1891)測量、1893. 12

7) 大垣市役所：大垣市史中巻、1930. 2

8) 岐阜県歴史資料館：館蔵写真集 第 1 集、1997. 3

9) 大垣市立東小学校百周年記念誌編集委員会：学校と郷土の百年 ひがし 大垣市立東小学校百周年記念誌、1976. 6

注

注1) 平山：J. ミルン、W・K・バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の書誌情報、発刊の経緯、初版及び 2 版の異本について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究その 1、日本建築学会計画系論文集 712、1419～1426 頁、平成 27(2015). 6

注2) 平山：J. ミルン、W・K・バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』掲載写真の撮影者について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究その 2、日本建築学会計画系論文集 719、171～177 頁、平成 28(2016). 1

注3) 平山：W・K・バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の写真解説について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究その 3、日本建築学会計画系論文集 729、2525～2531 頁、平成 28(2016). 11

注4) 平山：W・K・バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の写真撮影の日程について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究 その 4、日本建築学会計画系論文集 732、519～525 頁、平成 29(2017). 2

注5) 東洋学芸社：東洋学芸雑誌 122、585 頁、明治 24(1891). 11

注6) 平山：明治24(1891)年の濃尾地震においてバルトンが撮影した写真の枚数 W・K・バルトンの研究(67)、日本建築学会北陸支部研究報告集58、357～360頁、平成27(2015). 7

注7) 写真①、写真②は、平山：J. ミルン、W. K. バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』掲載写真の撮影者について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究 その 2、日本建築学会計画系論文集 719、171-177 頁、前掲、において、バルトンによる撮影と判断している。但し、写真③～写真⑥については、現段階ではバルトンによる撮影と考えられる、とするに留まる。そのため本稿では写真①～写真⑥を一括して扱う場合、“バルトンが撮影したと考えられる”とする表現を採った。

注8) GEJ2 版ではそれぞれ PLATE XXVIII.、PLATE XXIX. となる。

注9) 工学会：工学会誌 121、本会記事、1 頁及びジョン、ミルン：地震ニ就テ、3 頁、明治 25(1892). 1

注10) 参考文献 1) GEJ “PREFACE.” [前書]冒頭には以下の記載がある。

PREFACE.

THE greater number of the photographs that are reproduced in this book were made by one of the Authors, for the Imperial University of Japan. They are the property the university, and are copy-righted in its name in Japan. It is through the kind permission of the President, His Excellency Kato Hiroyuki, that we are allowed to make use of them.

[和訳] 前書 本書に掲載した写真のほとんどは、日本の帝国大学から依頼を受けて著者のひとりが撮影したものである。大学が日本で版權登録しているこれらの写真を本書に利用できるのは、加藤弘之総長のご高配のおかげである。

注11) 鳥海たへ子：遺構霧の中から 祖父バルトンを思う、31～32 頁、平成 6(1994). 4

注12) 平山：宮内庁所蔵濃尾地震関連写真と他機関所蔵写真におけるバルトンなど撮影者の比較 W・K・バルトンの研究(68)、日本建築学会北陸支部研究報告集 58、359～362 頁、平成 27(2015). 7

注13) 参考文献 2)

注14) 岐阜県図書館所蔵。なお、この写真は 2 枚ある。1 枚は『岐阜県下震災之図』と題される 1 枚で、“明治二十四年十月二十八日ニ起レル大地震ニ依リ岐阜愛知県両県下惨状写真入”と表書きされた和紙に包まれ、写真裏面には“明治二十四年十月二十八日ニ起レル大地震ニ依リ鐘楼其他破壊シ大鐘ノ墜落シタルトキハ響音速ク深山ニ響キ人心ヲ驚愕セシメタリト云フ”とある。もう 1 枚は『濃尾大震災』と題される 1 枚で、題字と“写真 34 枚”と記された同館が最近作成した紙箱に収納される。こちらは写真裏面に“廿四枚之一/明治廿四年十月廿八日六時半/モリハナ所有 ㊦”とある。この 2 枚も参考文献 2) 附属 CD-r に所収され、前者が gifu121(表面)、gifu122(裏面)、後者が gifu130(表面)、gifu131(裏面)となる。

注15) 参考文献 2) 附属 CD-r、kunai118、kunai119

注16) 参考文献 3) 24 頁

注17) 参考文献 4)

注18) 参考文献 4) 15 頁

注19) 参考文献 5)

注 20) 参考文献 5) 24 頁

注 21) 平山：『日本に於ける大地震-濃尾大地震 1891-』の翻訳と翻訳者武藤 綾男について W・K・バルトンの研究(59)、日本建築学会北陸支部研究報告集 57、535～538 頁、平成 26(2014). 7

注 22) 郷土出版編集部：写真集思い出のアルバム大垣、27 頁、昭和 58(1983). 5

注 23) 明治廿四年岐阜県震災誌草案、大垣町火災地略図、岐阜県歴史資料館所蔵。なお、本図は、参考文献 7) に図版として転載される。

注 24) 参考文献 6)

注 25) 参考文献 7) 所収

注 26) 平山：W・K・バルトンによる『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の写真撮影の日程について『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』の研究 その 4、日本建築学会計画系論文集 732、523 頁、前掲

注 27) 内閣官報局：官報 2510、明治 24(1891). 11/10、97 頁

注 28) 参考文献 1) 初版 PLATE XXVII. 解説

注 29) 参考文献 7) 116～117 頁。“大垣町火災地略図”では焼失地の北新丁。

注 30) 参考文献 3) 24 頁

注 31) 参考文献 4) 2 頁

注 32) 参考文献 8) 1 頁

注 33) 参考文献 8) 53 頁

注 34) 清水進：大垣城の歴史、132 頁、平成 24(2012). 3

注 35) 土屋純一、城戸久：美濃大垣城天守建築考、建築学会論文集 6、29～36 頁、昭和 12(1937)、土屋純一、城戸久：美濃大垣城天守建築考、建築雑誌 628、911～913 頁、昭和 12(1937). 7

注 36) 大垣城城郭絵図面、慶応 3(1868)

注 37) 参考文献 6)

注 38) 参考文献 7) 179 頁

注 39) 参考文献 9) 17 頁

注 40) 参考文献 9) 18 頁、“六街学校のころの校舎と校地（郭町）”とする配置図によれば、かつて校舎の北側には“げんかん”があったが、写真⑥ではこれが倒壊している。更に、参考文献 9) 17 頁の“六街学校（郭町）”とする写真では、植栽が繁茂し、写真⑥より後に撮影されたことは明らかであるが、ここでは“げんかん”が元に戻らずに改修が進んだことが分かる。

注 41) 参考文献 9) 18 頁

STUDY ON THE PHOTOGRAPH AND THE PHOTOGRAPHY PLACE PHOTOGRAPHED IN *OGAKI* BY W. K. BURTON

Study on “THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.” part 5

Ikuo HIRAYAMA *

* Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng., Dr. Design

This article considered the photograph which W. K. Burton photographed after the *Nobi* earthquake in *Ogaki* of the stricken area, and following points become clear.

The photograph which Burton photographed after the *Nobi* earthquake in *Ogaki* has 2 pieces of photograph ① and photograph ② put in “THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.”, 4 pieces of photograph ③～⑥ which was put in the Imperial Household Agency without being put in that book, I can confirm 6 pieces of existence in total at least.

In photograph ①, *Tenjinsya* and its south side site were photographed, looked to the north-northwest direction on the municipal road of east side of the *Tenjinsya*, at *Shinmachi* in *Ogaki* city. Photograph ②, Burton looked to the northwest direction from the *Tenjinsya* neighboring site and photographed fried lost territory, *Ogaki* Castle, *Ikeda* mountains of the rear. Photograph ③,④, he turned to the north from the *Tenjin* bridge southern coast and photographed the ruin of a fire of *Jyoren-ji* temple. Photograph ⑤, he overlooked the east side from *Ogaki* Castle tower and photographed it, and the Western-style building on the right side of screen is equal to the building of photograph ⑥. Photograph ⑥, he overlooked the former *Rokugai-gakko* school at *Kuruwamachi* and photographed it from the east bank of the moat.

(2016 年 12 月 9 日原稿受理, 2017 年 5 月 8 日採用決定)